

アンソニー・エリオット「新しい個人主義」の実証的検討 —ウェブ調査データの分析を通して—

An empirical examination of Anthony Elliott's "The New Individualism"
—An examination based on web survey data—

牧野 智和

大妻女子大学人間関係学部

Tomokazu Makino

Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University
2-7-1 Karakida, Tama-City, Tokyo, 206-8540 Japan

キーワード：アンソニー・エリオット、新しい個人主義、現代的自己、感情社会学

Key words : Anthony Elliott, The New Individualism, Contemporary self, Sociology of emotions

抄録

現代的自己論の最も新しい展開の一つといえるアンソニー・エリオットの「新しい個人主義」論は、世界的によく知られた議論でありながら、実証的な検討がほとんどなされていない。本稿では、2025年に実施したウェブ調査のデータを用いて、「新しい個人主義」の諸テーゼが（1）どの程度妥当性をもつのか、（2）それぞれどの程度相関するのか、（3）ネガティブな感情的コストを実際に発生させうるのか、（4）社会的属性とどのように関連しているのか、を検証する。

1. 社会学的自己論の系譜とアンソニー・エリオット

ジョージ・ハーバート・ミード (Mead 1934=2021^[1]) 以来、あるいはその前史となるウィリアム・ジェームズ (James 1892=1992^[2]) やチャールズ・ホートン・クーリー (Cooley 1902^[3]) 以来、社会学は「自己」という対象を考え続けてきた。社会学的自己論の展開において長らく中心となってきたのはミード以来のシンボリック相互作用論の立場によるミクロ社会学的考察だが (船津 1983^[4] ; 片桐 2000^[5]など)，より広い社会・時代的状況との関係から、自己やそれに付随すると考えられている性質の考察を行おうとする系譜もまたある。その嚆矢として、エーリッヒ・フロムの権威主義的パーソナリティの考察 (Fromm 1941=1984^[6]) やデヴィッド・リースマンによる社会的性格の考察 (Riesman 1950=1984^[7])，心理学者ではあるが社会学的考察に大きな影響を与えたエリク・エリクソンのアイデンティティ論などがある (Erikson 1959=2011^[8])。この系譜はやがてアンソニー・ギデンズのモダニティと自己意識との関連について

の考察 (Giddens 1991=2005^[9])，それに連なるジグムント・バウマンの流動的アイデンティティ論などへと続いているが (Bauman 2004=2007^[10])，現代におけるこの系譜の継承者かつトップランナーといえるのが、オーストラリアの社会学者アンソニー・エリオットである。

エリオットはこうした社会学的自己論の系譜を踏まえながらも、精神分析の知見や西洋における「個人主義」をめぐる理論的蓄積を考察にとりいれ、現代社会における自己のあり方について独自の議論を展開している。また、彼の議論においてもう一つ特徴的なのが、美容整形やSNSなどの現代文化、AIやアルゴリズムの台頭といった最新の事例を次々と議論の素材にとりいれ、自己との関連を論じていることである。その名声はグローバルなもので、ラウトレッジ社による『アイデンティティ研究ハンドブック』(Elliott 2011^[11]) の編者にもなっている。

しかしながら、先進的でインパクトのある議論を展開するエリオットの研究活動において、一つの小さくない難点が存在する。実証的根拠の曖昧

さである。たとえば、エリオットの主著の一つ『新しい個人主義』(Elliott and Lemert 2009^[12]) では、次節で紹介する「新しい個人主義」のアイデアを象徴する事例として、イギリスのタブロイド紙『デイリーメール』における豊胸手術を希望する女性が紹介されているのだが、エリオットの議論はこうした水準のエピソードにもとづいて展開される場合がかなり多い。あるいはより雑駁に、リアリティショーの隆盛や新しいiPhoneへの熱狂、というような言及をもってその理論的主張を解説しようとする場合も少なくない。

彼の議論の主軸を、社会学に留まらない人文社会科学における著名な先行研究を参照しながら展開される、現代的自己の理論的把握・理念型提出にあると捉えるなら、実証性の弱さは致命的な欠陥にはならないのかもしれない。しかしながら、グランド・セオリーが失効した今日の社会学において、実証的な検討を行わずに理論をそのまま受容することは行うべきではないだろう。インパクトのある議論であるならそれはなおさらである。また実際、実証的な検討を行うことでその理論的含意がより豊かになる場合もある。たとえば、上述したギデンズの「再帰性」概念は世界的・学際的にインパクトを及ぼしたものだといえるが、その実証的な検討を通して、再帰性については水準や作動の異なる複数の表われ方を想定すべきことを指摘し、それによってこの概念を分析対象に即した中範囲理論として活用できる可能性を示唆した研究がある（小川ほか編 2024^[13]）。

本稿ではこのような観点から、現代的自己論の最も新しいバージョンの一つであるエリオットの「新しい個人主義」について、量的調査データを用いた実証的分析を行い、その妥当性を検討するとともに、その理論的含意の深化を目指したい。

2. エリオットの「新しい個人主義」

2.1. 「新しい個人主義」の概要

本節ではエリオットの「新しい個人主義」についての見解を整理したうえで、実証的に検討されるべき論点をリサーチクエスチョンとして示す。

エリオット (Elliott and Lemert 2009^[12]; Elliott 2016^[14]など) は、西欧近代において歴史的な経緯をたどって定着・変容してきた「個人主義」のあり方が、現代においてさらに新たな様態をとるようになっていると主張する。近代における個人主義

は、18世紀末から19世紀前半にかけてのロマン主義の広がり、アレクシス・ド・トク维尔による「個人主義」の問題化、トク维尔の指摘を実現していくかのような20世紀における大衆文化の広がりと私事化の進行というように展開し、総じて道徳・社会への関心やそれを支える関係性が掘り崩され、ますます発展する資本主義やインターネットのもとで人々の私的欲望ばかりが喚起され、また増幅していくという経過をたどったとされる。

こうして伝統・道徳・宗教・中間集団などの影響力が弱まった現代においては、自らの吟味内省によって自己・親密性・キャリアなどをつくりあげていかねばならなくなることがウルリッヒ・ベックやギデンズの「再帰的個人化」論において既に指摘されている (Beck 2001=2022^[15]; Giddens 1991=2005^[9]など)。だがエリオットは、今日起きているのはそれだけではないという。経済および文化のグローバル化が進行し、企業間競争や文化の移り変わりがますます加速するなかで、人々はそれに適応すべく、吟味内省というよりも反射的に自らを次々と再形成・再構築・再発明・変革することを求められるようになっているとする。そのためには、即時の自己変革を可能にする自己啓発書や自己セラピー、お金さえ払えば自らの努力を必要とせずに変身ができる整形手術などに人々はますます魅了されるようになっているという。こうしたグローバルな経済・文化的変動と連動するかたちで、個人主義のあり方もまたかつてない様態に変わろうとしている——それがエリオットの指摘する「新しい個人主義」である。

「新しい個人主義」は、複数の著作において、一貫して四つのテーゼからなるものとして説明されている。以下、順に説明していきたい。

第一のテーゼは「自己変革への執拗な強調」である。述べたような経済・文化的変動のもとで、人々は上述した自己啓発書や整形手術、あるいは各種のダイエット法、新しいiPhone、ファッショントレンド、メイク、食べ物・飲み物、ライフスタイル、キャリア、オンライン上の自己表現など、ありとあらゆることがらを通して自らの変革・改善を行なう。また表現することに向かわせる文化的な推進力ないしはプレッシャーに人々はさらされている。

第二は「即時の変化への果てしない渴望」であ

る。自己変革のために購入した商品やそれによって得られた「自己」が中長期的に耐久するものどうかにかかわらず、今述べたような各種のアイテムを通して自らを即時に変身させるべしという欲望が、インターネットを含む各種メディアによって絶えず喚起されている。また、デジタル経済の進展は、吟味内省も努力する時間も必要としない、まさに指先一本を反射的に動かして購入するだけで即時の変身を可能にする選択肢を人々にもたらし、この渴望を加速させている。

第三は「速度とダイナミズムへの魅了」である。次々と現れ出てくる新しい自己実現の選択肢に、またオンライン上の情報の奔流についていき、自らのあり方をかつてなく高速にアップデートすることが当たり前のようにになっている。

そして第四が「短期主義とエピソード性」である。こうした消費および情報環境の変化に加え、グローバルな規模で短期契約や複数的キャリアが広がるなかで雇用が不安定化し、また友人・恋愛・家族関係も中長期的に安定したものから関係を取り結び続けることによってのみ存続する「純粹な関係性」(Giddens 1992=1995^[16])へと変化していくなかで、人々の人生が長期的に耐えうる物語ではなくなり、短期的なスパンで物語を書き換えられねばならなくなっている、もしくはその時々のエピソードの集積でしかなくなっている。

エリオットはこのような「新しい個人主義」に人々が浸かるとき、絶えず自らを変え続けねばならないという不安、そうしなければ使い捨てられてしまうという恐れといった「感情的コスト」がもたらされることになると述べている。

2.2. 本稿におけるリサーチクエスチョン

2006年に初版が刊行された『新しい個人主義』の反響は大きく、社会学のみならず経営学、政治学、カルチュラル・スタディーズまでにその関心は広がり、マスメディアでも多くとりあげられたという(Elliott and Lemert 2009^[12])。しかしながら、その主張は実証的根拠という点で難を抱えている。1節で紹介したようなタブロイド紙の記事に加え、どのような観点や基準からピックアップされたか分からぬ人物のエピソード、新しいiPhoneへの熱狂といった文化的動向の雑駁な一般化などを通じて解説されるその主張は、新奇性や物語性は高いかも知れないが、(だからこそ)実証的に確かめ

てみる必要があるだろう。実際、『新しい個人主義』の改訂版の序文では、同書の実証的根拠に対する批判があったことがエリオット自身によって言及されている。だが、彼自身によって「新しい個人主義」の実証的検証がその後なされたとは言い難い。他の研究者においてもそれは同様で、イタリアの若者が「個人化」を要請する社会的状況のなかでどのような意味づけを施して生きているのか、インタビューを通して明らかにしようとする論文のなかで、エリオットが一部参照されているという程度である(Colombo et al. 2021^[17])。

そこで本稿では、「新しい個人主義」の諸テーゼについて、以下の四つのリサーチクエスチョンにもとづいて実証的な検討を試みたい。そのアプローチにはいくつかの選択肢があると思われるが、本稿ではエリオットの主張を包括的な観点から検討すべく、量的調査を通じた検討を行っていく。

量的調査におけるリサーチクエスチョンの第一は、「新しい個人主義」の諸テーゼは、それぞれどの程度人々にあてはまるものなのか、というものである。これについては、エリオットの主張から、諸テーゼへの合致の程度をたずねる設問を作成し、その肯定回答率の程度をみるとことで、あてはまりの度合を確かめたい。

第二に、「新しい個人主義」の諸テーゼはそれぞれどの程度相關するものなのか。エリオットが挙げる四テーゼはただ並列に紹介されているが、これらは互いに連動する傾向なのか、それともいずれかが独立していたり、反作用したりする傾向をもつのか。エリオットの立論からすれば、おそらくすべてが正の相関関係をとるものと考えられているのだろうが、実際にそうなるのかどうかを確かめたい。

第三に、諸テーゼは実際に感情的コストをもたらすものなのか。エリオットは「新しい個人主義」への没入と不安・恐れといったネガティブな感情が相關すると指摘していたが、それは実際に確かめられる傾向なのか。また、これについても四テーゼいずれもがネガティブな感情と相關するのか、そうでないのか。立論上はすべてが正相関になると想定されているように思われるが、これを検証したい。

第四は、諸テーゼは社会的にどう偏在しているのか。『新しい個人主義』の改訂版の序文では、同書の議論が富裕層に偏っているのではないかとい

う批判があったことが紹介されている。エリオットはこれに対して、具体的な事例として紹介した人物の中には富裕層以外の者が含まれているとして、その議論のあてはまりが社会的に偏在したものではなく、グローバル化した世界、少なくとも西欧諸国やそのライフスタイルに近い国々に生きる多くの人々にあてはまるものだと述べている（Elliott and Lemert 2009^[12]），本稿では日本国内におけるあてはまりの社会的偏在性について確かめたい。これについては、年齢や性別、学歴、収入といった基本的属性との関連を検討する。

3. 調査概要

以下では、ウェブ調査のデータを用いて、今述べたリサーチクエスチョンの検証に取り組んでいく。調査対象は東京都に住む、20代から40代の男女である。対象者を東京都在住者としたのは、前節で社会的偏在性を確かめると述べたものの、エリオットが論じる先進的なライフスタイルは都市部を中心に実践されている傾向が強いと考えられ、まずは都市部におけるあてはまりの程度を検討すべきと考えられたことと、インターネット調査用パネルの蓄積がやはり都市部を中心としていることによるものである。全国的な傾向の分析については、今後の課題したい。

この調査対象について、調査会社マクロミルの提供するアンケートツール「Questant」を用いて筆者がウェブ調査画面を作成し、同社が保有するインターネット調査用パネルを利用してウェブ調査を実施した。調査時期は2025年7月で、目標サンプル数は300、結果として回収されたサンプル数は336である。この336件について、「ずっと同じ回答を入力し続けている」「(四件法の質問の場合であれば)1・4・1・4などのように極端な回答をし続けている」「極端に回答時間が短い」等の「手抜き回答」と思われるケースについて、筆者と大妻女子大学人間関係学部の学生2名（社会調査士のカリキュラムを受講し、量的調査の基本的な知識・技術を習得している）と共同で検討を行い、26の回答を無効回答として除外した。そのため、本調査における有効回答数は310となる。以下、このデータについて、一つの節で一つのリサーチクエスチョンに取り組んでいくこととする。

4. 「新しい個人主義」の各テーゼはどの程度妥当するのか（RQ1）

「新しい個人主義」の四つのテーゼを検討するための設問として、エリオットの議論を踏まえ、本調査では表1のような項目を設けた。項目の作成にあたっては、一部、筆者が一員として参加している青少年研究会によって2022年に実施された「若者の生活と意識に関する調査」「生活と意識に関する世代比較調査」の調査項目を参考した。これらの単純集計結果を示したものが図1である。

総じて、諸テーゼの内面化の程度をたずねた項目の肯定回答率が高く、その行動としての表われをたずねた項目の肯定回答率が低いという結果になっているといえる。

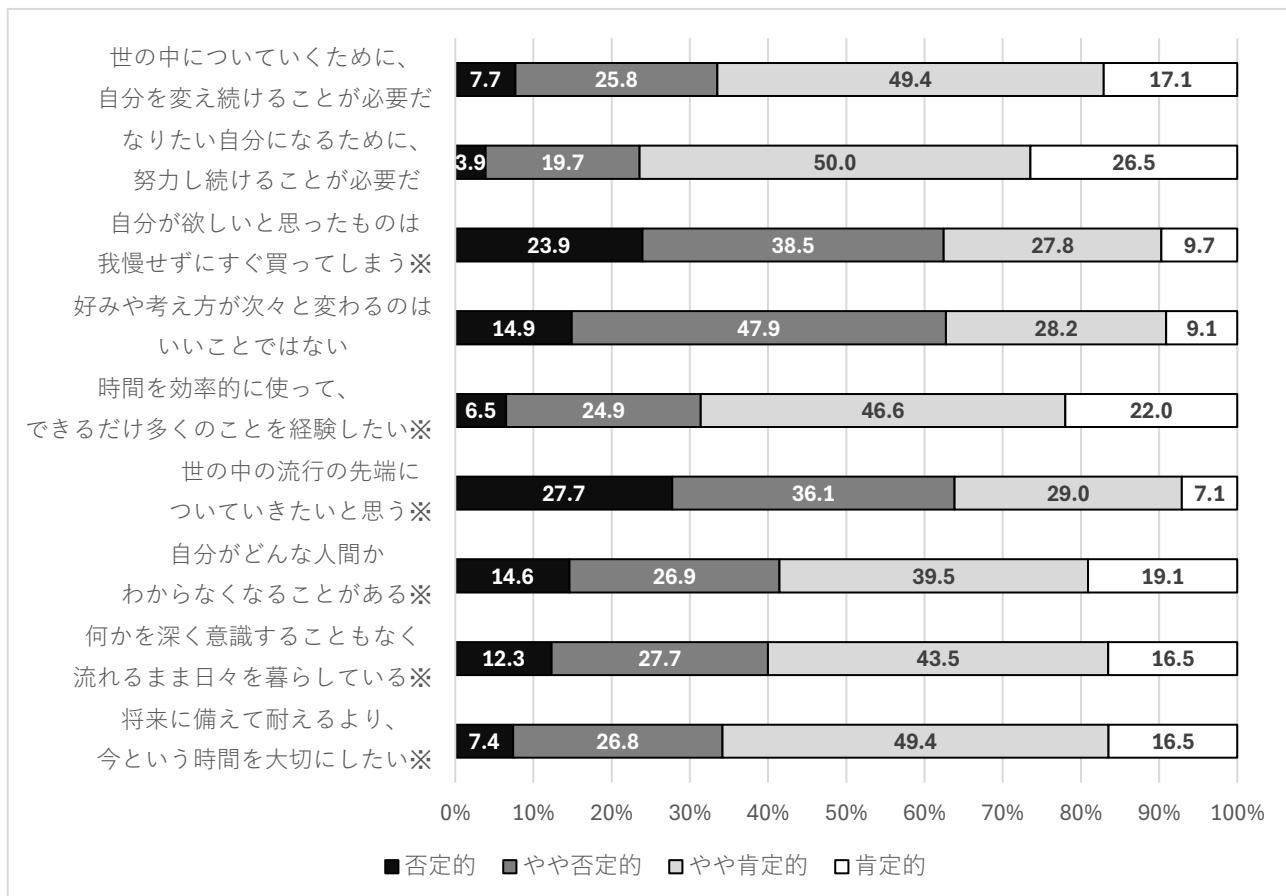
順にみていくと、第一のテーゼである自己変革については、「世の中についていくために、自分を変え続けることが必要だ」では66.5%、「なりたい自分になるために、努力し続けることが必要だ」では76.4%が肯定的に回答しており、このテーゼは多くの人々に内面化されているといえる。

第二のテーゼである即時変化については、「好みや考え方が次々と変わるのはいいことではない」の肯定回答率は37.2%だが、これは逆転項目として置いているものなので、否定的に回答した62.8%は、次々と変わってもいいと考えていることになる。そのため、即時変化志向はおおむね内面化されているといえるだろう。だが、「自分が欲しいと思ったものは我慢せずにすぐ買ってしまう」の肯定回答率は37.5%であるため、即時変化志向そのものについては肯定的であっても、それが消費という行動においてそのまま表れ出るわけではないと捉えることができる。

第三のテーゼである速度への魅了については、そのような志向の今日的なパターンとして「時間を効率的に使って、できるだけ多くのことを経験したい」という、いわゆる「タイプ志向」（稻田2022^[18]）に関する設問を設けたが、その肯定回答率は68.6%と多数派を構成している。だが、志向の内面化の程度を問うこの設問に対して、「世の中の流行の先端についていきたいと思う」という流行への追随という（つまり、これも消費）行動に関する設問では、その肯定回答率は36.1%と少数派になる。第二のテーゼと同様、テーゼの内面化の程度と、その行動としての表われには段差があるようである。

表1. 「新しい個人主義」に関連する項目とその設置趣旨

テーマ	項目	趣旨
①自己変革	世の中についていくために、自分を変え続けることが必要だ	自己変革志向の内面化として
	なりたい自分になるために、努力し続けることが必要だ	自己改善志向の内面化として
②即時変化	自分が欲しいと思ったものは我慢せずにすぐ買ってしまう	即時変化志向の表われとして
	好みや考え方が次々と変わるのはいいことではない	即時変化志向の内面化として(逆転項目)
③速度	時間を効率的に使って、できるだけ多くのことを経験したい	速度志向の内面化として
	世の中の流行の先端についていきたいと思う	速度志向の表われとして
④短期主義・エピソード性	自分がどんな人間かわからなくなることがある	内省性の喪失として
	何かを深く意識することもなく流れるまま日々を暮らしている	時間的展望の喪失として
	将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい	時間的展望の喪失としての現在志向



※がついている項目は「あてはまらない」～「あてはまる」の四件法。無印の項目は「そう思わない」～「そう思う」の四件法。なお、図1の集計において無回答は除外している。

図1. 「新しい個人主義」に関連する項目の単純集計結果

第四のテーゼである短期主義・エピソード性については、中長期的な安定が望めなくなることから生じうる態度として三つの項目を設けたが、内省性の喪失を表わす「自分がどんな人間かわからなくなることがある」の肯定回答率は 58.6%，時間的展望の喪失を表わす「何かを深く意識することもなく流れるまま日々を暮らしている」は 60.0%，時間的展望の喪失の結果として生じうる現在志向を表わす「将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい」は 65.8% と、いずれも過半数以上が肯定的に回答している。

以上から、「新しい個人主義」の諸テーゼは、その内面化の程度を問う意識の水準としてはおおむねあてはまるが（ただ、絶対的多数というわけではなく、はつきり肯定的というよりはやや肯定的という回答が多い），それが実際に消費行動として表れ出るかというと、そこまでではないという解釈ができるだろう。行動に関して、本調査では表 1・図 1 で示したもの以外にもいくつか項目を設けているが、エリオットが具体的行動の例として挙げた自己啓発書購読にあたる「自己啓発の本（自分を変えたり、高めたりするための本）を買う」ことの経験者は 25.0%，美容整形とはいかないまでもより包括的で穩当な身体改善行動といえる「フィットネスクラブやスポーツジムに通う」ことの経験者は 24.4%，「流行のファッショントレンドをチェックして乗り遅れないようにしている」の肯定回答率は 27.8% と、それぞれ二割台となっている。これらのうち行動に関する二項目についてもう少しみると、自己啓発書を購読したことがあり、かつフィットネスクラブ等に通ったことのある者は 12.0%，どちらか片方のみの経験者は 25.3%，どちらも行っていない者が 62.7% となっている。ここから、あ

る自己啓発的行動を行う者は他の行動も行う傾向があることがいえそうだが、全体的な回答傾向を考えると、内面化の程度と行動としての表われには段差があるとやはり解釈すべきだろう。

5. 「新しい個人主義」の各テーゼは関連するのか (RQ2)

次に、「新しい個人主義」の諸テーゼはそれぞれどの程度関連するものなのだろうか。表 1・図 1 で示した全項目を掛け合わせるのは煩雑であり、また各テーゼに関する項目をまとめるとしても、信頼性分析の結果クロンバッックのアルファの値が低いテーゼがあるために集約は難しい。そこで以下では、第一テーゼについては「世の中についていくために、自分を変え続けることが必要だ（以下、「自己変革」と略記）」、第二テーゼについては「自分が欲しいと思ったものは我慢せずにすぐ買ってしまう（同「即時購入」）」、第三テーゼについては「時間を効率的に使って、できるだけ多くのことを経験したい（同「タイプ意識」）」を、それぞれのテーゼを端的に象徴する項目としてピックアップし、分析を行っていく。第四テーゼについては、中長期的な安定が望めなくなることから生じうる三つの異なる態度を問うているため、抽出はせずに三項目それぞれについて分析する。以下では、

「自分がどんな人間かわからなくなることがある」は「内省性の喪失」、「何かを深く意識することもなく流れるまま日々を暮らしている」は「時間的展望の喪失」、「将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい」は「現在志向」として略記する。これら六項目について、相関分析を行った結果が表 2 である。

表 2. 「新しい個人主義」の諸テーゼの関連

	自己変革	即時購入	タイプ意識	内省性の喪失	時間的展望の喪失	現在志向
自己変革	1.000	.083	.258**	.182**	.123*	.164**
即時購入		1.000	.143*	.182**	.081	.099
タイプ意識			1.000	.125*	.092	.131*
内省性の喪失				1.000	.403**	.217**
時間的展望の喪失					1.000	.221**
現在志向						1.000

*: p<0.05, **: p<0.01 (統計的に有意な組み合わせについてはセルに色をついている)

表2が示しているのは、各テーゼはおおむね正の相関関係にあるということである。だが、すべてが正相関しているわけではなく、相関している項目についても、一概に強い相関がみられるわけでもない。

順にみていくと、自己変革はタイパ意識、内省性の喪失、時間的展望の喪失、現在志向とそれぞれに正相関しているが、即時購入とは相関がみられない。自分を変え続けることが必要だという意識は、そのために時間を効率的に使おう、将来よりも今を大事にしようという意識と共振するといえるが、一方で内省性や時間的展望の喪失といった欠落感と表裏一体のものになっている。牧野智和（近刊^[19]）が、2012年時点においては自己啓発書購読経験がポジティブな自己意識と結びついていたが、2022年時点においてはネガティブな自己意識と結びつくようになっていると指摘していることを踏まえると、自己変革志向と欠落感の相関は今日的なものと解釈できるかもしれない。

即時購入はタイパ意識、内省性の喪失とは正相関しているが、それ以外の三項目とは相関していない。欲しいと思ったものを我慢せずにすぐ買ってしまうという態度は、（我慢せず）効率よく時間を使いたいという意識とやはり共振しているが、そのような態度は自分がどんな人間か分からぬという感覚を高めもするし、逆にそのような感覚が我慢をしない即時購入に走らせるともとれる。

タイパ意識は、時間的展望の喪失以外の各項目

と正の相関がみられる。効率よく時間を使おうとする意識は、そのことを通して自分を変えよう、欲しいと思ったものを先延ばしせずにすぐ買おう、将来よりも今を大事にしようとする意識と連動するが、それは自分がどんな人間かが分からぬという感覚によってもたらされている、あるいはそのような喪失感をより強めるものと解釈できる。

第四テーゼについて一気にみていくと、まず内省性の喪失は唯一全項目と正の相関がみられる。時間的展望の喪失は、自己変革、内省性の喪失、現在志向と正の相関がみられるが、即時購入、タイパ意識とは相関がみられない。現在志向は即時購入以外の各項目と正相関している。これらと他のテーゼに関する項目の解釈は既に述べたので繰り返さないが、第四テーゼに関する三つの項目はそれぞれが正相関し、内的に一定のまとまりをもつてるとみなすことができるだろう。自分がどんな人間かわからなくなるという内省的感覚の喪失は、何かを深く意識することもなく流れるまま日々を暮らすという時間的展望の喪失、および将来よりも今を大切にしたいという現在志向とそれぞれ運動しているのである。

このように、総じていえば各テーゼはおおむね正の相関関係にあるといえるが、内省性の喪失が全項目と正相関していることを考えると、「新しい個人主義」の四テーゼを支えているのはこの要素だとみることができるかもしれない。これについては、次節での検討を経て再度考えたい。

表3. 「新しい個人主義」の諸テーゼと感情の関連

	不安な	自信がない	不機嫌な	疲れた	緊張した	いらいらした	むなし	物足りない	楽しい
自己変革	.206**	.089	.018	.109	.070	.096	.074	.099	.151**
即時購入	.019	.041	.051	.049	.019	.068	.089	.074	.185**
タイパ意識	.152**	.044	.002	-.012	.057	.072	.059	.120*	.236**
内省性の喪失	.381**	.434**	.327**	.313**	.322**	.341**	.329**	.336**	-.066
時間的展望の喪失	.254**	.324**	.224**	.257**	.196**	.258**	.223**	.204**	-.010
現在志向	.054	.086	.079	.132*	.053	.091	.083	.116*	.068

*: p<0.05, **: p<0.01 (統計的に有意な組み合わせについてはセルに色をついている)

6. 「新しい個人主義」は感情的コストを強いるのか (RQ3)

エリオットは、「新しい個人主義」は人々に不安や恐れといった「感情的コスト」をもたらすと述べていたが、実際にこれらの関係を見出しができるだろうか。本調査では、心理学における感情研究（寺崎ほか 1992^[20]；坂野ほか 1994^[21]）を参照して、複数の感情語について「あなたは最近、これらの感情をどのくらいをどれくらい感じていますか」として、その体感の程度を問う項目を設けた。エリオットの述べる「感情的コスト」は、基本的にはネガティブなものだと考えられるため、一般的にはネガティブだと考えられる感情語を多くたずねているが、「新しい個人主義」と感情との関連を包括的に考えるため、「楽しい」というポジティブな感情語もたずねている。四テーゼと各感情語の体感との相関分析の結果が表3である。

統計的に有意な相関が多くみられるのが、「不安な」という感情語であった。これは自己変革、タイプ意識、内省性の喪失、時間的展望の喪失とそれぞれ正相関している。「新しい個人主義」が不安をもたらすというエリオットの指摘は、実証的にある程度確かめることができるとまずいえるだろう。

だが、自己変革、即時購入、タイプ意識については、他のネガティブな感情語との関連がほぼみられない。むしろ、これら三テーゼは「楽しい」という感情語とも正相関している。世の中についていくために自分を変え続けていくことは、そうしなければ使い捨てられてしまう不安と表裏一体でありながらも、自分を変えていくことへの楽しみにもつながっている。自分が欲しいと思ったものをすぐに買うという行動は、ネガティブな感情とは相関がなく、それ自体の純粋な楽しさに突き動かされている。時間を効率的に使って多くのことを経験しようとする意識は、世の中に遅れてしまうことへの不安とやはり表裏一体でありながらも、

さまざまなことを経験する楽しみや、既存の経験では物足りないとする貪欲さにもつながっている（「物足りない」という感情語はネガティブな位置づけで置いたものだが、この項目の解釈としてはそれを貪欲さと捉えた方が妥当ではないかと思われる）。エリオットの議論は、「新しい個人主義」の帰結としてのネガティブな感情的コストという立論になっているために悲観的な色彩をもつものだが、「楽しさ」のようなポジティブな感情にも支えられている側面もまたあると考えられる。

全体的に、ネガティブな感情語との相関がはっきり表れたのは、内省性の喪失と基本的感情の喪失であった。自分がどんな人間かわからなくなることがある、何かを深く意識することもなく流れまる日々を暮らしている、という感覚は、ネガティブな感情語として設けたすべての項目と正の相関がみられ、「楽しい」というポジティブな感情語とは相関がみられないという、非常にはつきりした傾向が出ている。現在志向は、短期主義とエピソード性というテーゼをこれらとともに構成する要素ではあるが、相関の傾向は一致していない。のことと、前節で示した内省性の喪失が他のテーゼすべてと正相関していることを考えると、「新しい個人主義」の四テーゼを支えているのはこうした喪失感覚ということになるのではないだろうか。その観点から感情的コストの発生について捉え直すと、コストをもたらすのは自己変革・即時変化・速度への強迫性というよりは、それらを支えている内省性と時間的展望の喪失というように解釈できるのではないだろうか（ただ、これはエリオットが述べる「新しい個人主義」が「感情的コスト」をもたらすという因果関係を想定した場合の話である。意識項目と感情項目のどちらかが時間的に先行するかは、本調査のようなワンショットサーベイでは判別ができない）。

表4. 諸テーゼと個人年収・メディア利用時間との関連

	自己変革	即時購入	タイプ意識	内省性の喪失	時間的展望の喪失	現在志向
昨年の個人年収	.000	.073	.067	-.202**	-.233**	-.105
平日の一日平均利用時間 テレビ	.074	-.035	.127*	.137*	.076	.118*
平日の一日平均利用時間 インターネット (SNS 含む)	.035	.078	.149**	.113*	.125*	.002

*: p<0.05, **: p<0.01 (統計的に有意な組み合わせについてはセルに色をついている)

7. 「新しい個人主義」は社会的に偏在するものなのか (RQ4)

最後に、四テーゼと各種社会的属性との関連を検討したい。だが、四テーゼ六項目について、性別・年代（10歳区切り）・学歴（大卒／非大卒）・仕事（正規／非正規／被就業）を独立変数としてクロス集計（カイ二乗検定）を行ったものの、統計的に有意な差がみられた組み合わせは二四パターンのうち一つもなかった。そのため、少なくとも二変数間の関係においては、「新しい個人主義」への接近傾向は、社会的な属性によって偏っているものとはいえないようである。ただ、個人年収（9段階）で相関分析を行うと、内省性の喪失・時間的展望の喪失において負の相関がみられた（表4）。収入の不安定性が自分自身や時間的展望を見失わせるということは、エリオットの指摘を待つまでもなく想像できることだが、こうした相関は確認できたことを考えると、やはり他の基本的属性について統計的に有意な差がみられないことが際立つだろう。

エリオットは、「新しい個人主義」を推し進める社会的条件の一つとして情報環境の変化についてしばしば言及しているため、社会的偏在を測る観点として、本調査ではメディア利用時間についても聞いている。表4には諸テーゼと、テレビとインターネット（SNS含む）の平日平均利用時間との相関分析の結果を掲載しているが、自己変革と即時購入については関連がみられず、タイパ意識と内省性喪失についてはテレビとインターネットの利用時間が、時間的展望の喪失についてはインターネット、現在志向についてはテレビがそれぞれ正相關しているという結果になった。タイパ意識や内省性喪失感覚が強くなるからメディア利用時間が長くなるのか、メディア利用時間が長くなるからそうした意識・感覚が強くなるのかは、本調査の設計上これ以上確かめることはできない。また、なぜ時間的展望の喪失がインターネットにだけ、現在志向がテレビにだけ相關するのかを考察すること、つまり各メディアの特性を問うことは本稿の目的からはずれることになるのでこれ以上掘り下げることはしない。だが、メディア利用は社会的属性よりは「新しい個人主義」への曝露に関係があるといえそうである。

8. まとめと今後の課題

本稿では、エリオットの「新しい個人主義」について、四つのリサーチクエスチョンにもとづき実証的な検討を行ってきた。第一に、「新しい個人主義」の諸テーゼのあてはまりについては、その内面化の程度を問う意識の水準としてはおおむねあてはまるが、実際にそれが特定の行動に集中して表れ出てくるわけではないという、意識と行動の段差が推測される結果となった。第二に、「新しい個人主義」の諸テーゼの相関については、すべてが正相関しているわけではないが、おおむね正の相関関係がみられ、特に内省性の喪失が全項目と正相関しているという結果となった。第三に、諸テーゼと感情的コストとの相関については、不安については複数のテーゼとの正相関が確かめられたが、全テーゼが一概にネガティブな感情的コストをもたらすとは言い難く、「楽しさ」のようなポジティブな感情とも相関していることが明らかになった。ただ、内省性の喪失と基本的感情の喪失にはネガティブな感情語との相関がはつきり表れたことから、RQ2の結果と合わせて、こうした喪失感覚が「新しい個人主義」の中心となるテーゼで、感情的コストもそこからもたらされているのではないかと考えられた。第四に、諸テーゼの社会的偏在については、収入とメディア利用時間については一部のテーゼとの関連を見出すことができたが、性別・年代・学歴・職業については統計的に有意な差が検出できなかった。

以上から、「新しい個人主義」についての実証的検討を経て、諸テーゼに関する意識と行動のずれ、諸テーゼ間の関係、諸テーゼと感情的コストの関係、社会的属性との関連の弱さがそれぞれ明らかになり、議論の解像度を上げることに本稿は貢献したといえるだろう。しかしながら、「新しい個人主義」の実証的検討はこれで済んだというわけではなく、課題が多く残されている。

まず、本調査におけるサンプルの問題である。東京在住の300人強というサンプルではなく、より広く、またより多くの調査対象者を求めて、本稿で得られた知見は再度検証される必要があるだろう。

また、「新しい個人主義」の諸テーゼについても、本稿で行ったのは一つのテーゼについて二ないしは三問という少ない設問数での検討に留まっており、（本調査にあたって事前によく検討したつもり

ではあるが）今後より多面的な観点から検討し、より多くの設問を用意して諸テーゼの内実を解析していく必要がある。その際の観点として、まず第二テーゼ「即時の変化への果てしない渴望」についていえば、本調査では消費行動そのものについてと、即時変化志向そのものについての項目を設けたが、より端的に即時変化のための消費行動を問うというやり方がありえる。第三テーゼ「速度とダイナミズムへの魅了」についても、本調査では流行への意識を問うているが、実際の行動を問えばまた結果は変わってくるかもしれない。第四テーゼ「短期主義とエピソード性」については、本調査で問うたのはテーゼの帰結としての「感情的コスト」に近い内容である可能性があり、より端的に自己の短期主義化とエピソード化を問うような項目を置いてもよいかもしれない。ただ、こうしたことがらは本稿における課題であるとともに、エリオットの議論においてこれらが明確に判別されていないという難点に由来するものともいえる。そのため、今後の検討においてはエリオットの議論の構成要素を洗い出し、「新しい個人主義」における（自己）意識・感情・行動の関係をより明確化して、理論仮説と測定項目の関係性を精緻化していくことがまずなすべき課題となるだろう。また、具体的な行動についても、エリオットが想定している西欧諸国と日本のライフスタイルの相同意性・相違性について検討し、日本において「新しい個人主義」が固有に発露したものといえるような行動項目を設ける選択肢もありうるだろう。

そして、社会的属性との関連が二変数間では見出せなかつたが、これは各変数の影響を統制した多変量解析を行えば、結果が変わってくる可能性がある。本稿でそれを行わなかつたのは、「新しい個人主義」の根本的な前提になっているグローバル化、あるいはグローバル化・デジタル化した資本主義への曝露にかかわる変数は日本国内における調査で測ることが容易ではないと考えられ、設問として用意できなかつたことによる。今後、この点をフォローすべく、調査対象者の点のみならずより包括的な観点から調査を計画・実施していく必要がある。

だが、本稿ではその知名度と反響こそ大きいものの、ほぼ実証的検討が行われていない「新しい個人主義」について、量的調査データの分析を通じた検討可能性を示し、「新しい個人主義」の諸テ

ーゼの解像度向上に関するいくらかの知見を提出し、一步を踏み出したということはできる。筆者に限らず、このテーマについての実証的検討が今後進んでいくことを期待したい。

付記

本稿は令和7年度大妻女子大学戦略的個人研究費（N2521）の助成を受けたものです。

引用・参照文献

- [1] Mead, G. H., 1934, *Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, University of Chicago Press. (山本雄二訳, 2021, 『精神・自我・社会』みすず書房.)
- [2] James, W., 1892, *Psychology: Briefer Course*, Macmillan. (今田寛訳, 1992, 『心理学（上）』岩波書店.)
- [3] Cooley, C. H., 1902, *Human Nature and the Social Order*, Charles Scribner's Sons.
- [4] 船津衛, 1983, 『自我の社会理論』恒星社厚生閣.
- [5] 片桐雅隆, 2000, 『自己と「語り」の社会学—構築主義的展開』世界思想社.
- [6] Fromm, E., 1941, *Escape from Freedom*, Rinehart. (日高六郎訳, 1984, 『自由からの逃走 新版』東京創元社.)
- [7] Riesman, D., 1950, *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*, Yale University Press. (加藤秀俊訳, 1984, 『孤独な群衆』みすず書房.)
- [8] Erikson, E. H., 1959, *Identity and Life Cycle*, International Universities Press. (西平直・中島由恵訳, 2011, 『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房.)
- [9] Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press. (秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, 2005, 『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- [10] Bauman, Z., 2004, *Identity* (1st Edition), Polity Press. (伊藤茂訳, 2007, 『アイデンティティ』日本経済評論社.)
- [11] Elliott, A.(ed.), 2011, *Routledge Handbook of Identity Studies*, Routledge.
- [12] Elliott, A. and C. Lemert, 2009, *The New Individualism: The Emotional Costs of Globalization*, Routledge.

- [13] 小川豊武ほか編, 2024, 『「最近の大学生」の社会学——2020年代学生文化としての再帰的ライフスタイル』ナカニシヤ出版.
- [14] Elliott, A., 2016, *Identity Troubles: An Introduction*, Routledge.
- [15] Beck, U. and E. Beck-Gernsheim, 2001, *Individualization: Institutionalized Individualism and its Social and Political Consequences*, Sage Publications. (中村好孝ほか訳, 2022, 『個人化の社会学』ミネルヴァ書房.)
- [16] Giddens, A., 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press. (松尾精文・松川昭子訳, 1995, 『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』而立書房.)
- [17] Colombo, E., P. Rebughini and L. Domaneschi, 2021, "Individualization and Individualism: Facets and Turning Points of the Entrepreneurial Self among Young People in Italy," *Sociology*, 56(3): 430-46.
- [18] 稲田豊史, 2022, 『映画を早送りで観る人たち——ファスト映画・ネタバレーモンテンツ消費の現在形』光文社.
- [19] 牧野智和, 近刊, 「自己啓発書の位置価を再考する——なぜリンクは失われたのか」牧野智和編『若者にとって「自己」とは何か(仮)』ナカニシヤ出版.
- [20] 寺崎正治ほか, 1992, 「多面的感情状態尺度の作成」『心理学研究』62: 350-6.
- [21] 坂野雄二ほか, 1994, 「新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討」『心身医学』34: 629-36.

Abstract

Anthony Elliott's theory of "The New Individualism" is one of the most recent developments in contemporary self-theory and is well known worldwide. However, there has been little empirical examination of his claims. In this paper, we use data from a web survey conducted in 2025 to address the following research questions regarding the various theses of "The New Individualism." (1) To what extent are they valid? (2) To what extent are they correlated with one another? (3) Do they generate negative emotional costs? (4) How are they related to social attributes?

(受付日: 2025年8月28日, 受理日: 2025年11月19日)

牧野 智和 (まきの ともかず)

現職: 大妻女子大学人間関係学部教授

プロフィール:

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学 博士(教育学)

専門は社会学, アイデンティティ論, 若者研究.

早稲田大学教育総合研究所助手, 日本学術振興会特別研究員などを経て, 大妻女子大学に勤務した.

自己・感情に関する社会学的研究を行っている.

主な著書:

社会は「私」をどうかたちづくるのか. 筑摩書房, 2025.

創造性をデザインする——建築空間の社会学. 効草書房, 2022.

日常に侵入する自己啓発——生き方・手帳術・片づけ. 効草書房, 2015.

自己啓発の時代——「自己」の文化社会学的探究. 効草書房, 2012.